

## 文学

イコンジェ  
李建濟 (立命館大学コリア研究センター客員研究員)ユン デソク  
尹大石 著

『植民地文学を読む』(ソミヨン出版、2012年)

윤대석 『식민지 문학을 읽다』 소명출판, 2012년

明知大学国語国文学科教授の尹大石は日帝末期韓国文学を研究する中堅学者である。彼はこの時期の「親日文学」を「国民文学」と呼ぶことを提案する。彼の見解によれば、日帝末期〔注：植民地末期〕文学には画一化された植民主義文学とともに脱植民主義文学も併存するためだという。このような一貫した問題意識のもとで行われてきた彼の著述活動は、二冊目の著書となる本書をもってもう一つの結実を实らせることになった。

もはや親日文学を中心とする日帝末期文学研究は量質ともに多く積み重ねられ、「親日文学」研究に対して過去のように「親日」を擁護する、または「国文学」研究ではないといったような批判はあまり聞かなくなってきた。このような緊張の消滅は、韓国＝近代＝文学の他者に対する探求と韓国社会を眺める他者的な視線の復権から始まった日帝末期文学研究が自動化（惰性化）したことを意味するところもある。

著者に内包されている「社会的他者意識」は金史良に対する共感へ、そして日帝末期文学研究へとつながっていった。「国民国家から排除された者の視線で世の中を眺めること」、これが著者の問題意識の発端だった。日帝末期文学は韓国近代文学史の中でこのような視線で生まれたほぼ唯一の文学であるため、韓国文学史において重要な位置を占めているという。このような問題意識をもって書かれた最初の著書『植民地国民文学論』（亦楽、2006年）以来の二冊目となる本書は「日帝末期文学の脱植民的・脱近代的可能性を探求する」という問題意識の延長線上に位置する。

「第1部、国民／文学」は総論としての性格を持つが、「親日清算の意味と限界」には「親日」問題に対する著者の基本的な考え方が反映されている。著者は、国家主導の「親日反民族行為真相糾明に関する特別法」で設定されている「民族精気の回復」という法益とその特別法のもう一つの目標である「社会正義の実現」の間にはかなりギャップがあるという。「1940年代『国民文学』」は当時の文学を概観しており、「韓国近代文学研究の新しい領域」はタイトルどおり、韓国近代文学研究で新しく登場した二つの分野—「文化研究」と「ポストコロニアル（postcolonial）研究」—を紹介しつつ、日帝末期文学研究が持つ現在の意味を考察した文章である。「叙事を通じての記憶の抑圧と記憶の分有」では安懐南の小説「火」（1946）と同様、他者体験を抑圧／忘却せず、共同体の集団記憶を語る方法を考察しており、「日本と日本人をみる分裂の視線、単一の視線」では韓国文学の中で過度に抽象画・固定化されている日本と日本人のイメージを言及している。

「第2部、言語／翻訳」では言語・翻訳・文学教育問題を中心に日帝末期文学について論じた。「朝鮮

語の『最後の授業』では、日帝時代朝鮮語授業廃止政策について金史良の小説「草深し」（1940）にみる小説的抵抗方法を紹介し、「1930年代の末における林和の言語論」では日帝の朝鮮語廃止政策に対する林和の言語論的抵抗方法を紹介した。「1940年代韓国文学における翻訳」では植民地主義イデオロギーの電波媒体としての翻訳が、むしろ植民地朝鮮の作家によって彼らのフレームに組み替えられて専有される様子が紹介されている。また「京城の空間分割と精神分裂」では、今和次郎の考現学的方法を標榜した朝鮮人作家の小説を通じて、京城がいかにして朝鮮人区域と内地人区域に分割され、植民地人としての心象が形成されていったのか、さらに空間分割が崩れる1930年代後半の小説空間がどのように形成されたのかを考察した。「親日文学と親日教育」では韓国国語教科書の「親日文学」教育の中に内在する国家イデオロギーを紹介した。

「第3部、作家／テキスト」では植民地問題に対する作家の対応の仕方を分析した。「日本という鏡—李光洙がみた日本、日本人」では「京城の空間分割と精神分裂」で示された問題意識を李光洙の場合に適用して考察し、「金起林の詩論における『科学』」では金起林の自然科学的方法論が1940年代の反科学的全体主義の風潮に対してどのように対応し得たのかについて説明した。その外、「アカデミズムと現実の間の緊張」では、日帝末～解放空間における実践的哲学者であった朴致祐の哲学思想を概観し、「崔仁勳の小説を精神分析的に読み取る」では現代小説家である崔仁勳の小説に込められている植民と戦争体験から幼年期への退行現象とタナトス（Thanatos、死の欲動）を読み出している。

最後に「第4部、対話／疎通」には数冊の著書に関する書評を収録している。

著者の尹大石は、日帝末期文学が現在進行形であることは「親日」清算が完成されていないためではないという。むしろ、日帝末期文学の見方と継承、清算問題が「私たちはどのような社会を目指すべきか」という価値に結びついている点において、日帝末期文学は現代的かつ未来的である。本書は、この時期の文学に対する異なる見方と立場の衝突を考察することを通じて、現実を診断すると同時に、他者の多様性を認め、さらに他者との共存を模索する機会を与えてくれる道案内としての役割が期待される。



チェソンミン  
崔聖旻 著

『近代の叙事テキストとメディアテクノロジー』（ソミョン出版、2012年）

최성민 『근대 서사 텍스트와 미디어 테크놀로지』 소명출판, 2012년

本書は文学評論家・西江大学国語国文学科教授の崔聖旻が博士学位論文を基に発刊したもので、メディアの形態が目まぐるしく変わる時代にとっての文学の運命について問うている。著者は「文学」という概念が近代的学問制度の影響と印刷技術の発達によって、印刷された「文字」だけに固定されてしまったと、根本的に指摘している。また「文学危機論」は文学が紙上の文字を通じて疎通されるという時代錯誤的な判断から始まったため、近代的文学概念を解体して再構成しなければ文学の危機は乗り越えら

れないと診断する。

著者は既存の「文学」を「叙事テキスト」という概念に代替させ、小説と映画、さらにはコンピューターゲームまでも、メディアテクノロジーの発達という流れの中で一貫した媒体変化様相としてまとめる観点を提示している。実はこのような議論は新しいわけではない。しかし、初期の近代文学から今日までを総括し、そしてこれからの文学／叙事テキストまでも視野に入れて論じていることが本書の長所である。近代以降登場した新聞、雑誌、タクチ本〔訳注：「タクチ」はめんこを指す朝鮮語。「タクチ本」とは19世紀末朝鮮で流行していたハングルの大衆小説本で、表紙が子供のめんこのように安っぽくカラフルに印刷されたことから名づけられた〕のような印刷媒体はもちろん、演劇、映画、放送、インターネットなどのメディアは各時代の先端メディアテクノロジーの産物であり、人間の本能が持つ叙事への欲望はこれらのテクノロジーを利用して、自分の考えと感情、話を伝達しようとしてきた。

また「ニューメディア」、すなわち「新メディア」の概念も新たに規定している。今一般にニューメディアといえばモバイル、インターネットなどの先端デジタル機器を思い浮かぶであろうが、20世紀初期には新聞も「ニューメディア」であった。本書は20世紀以降に登場した様々なニューメディア、すなわち新聞、雑誌、演劇、映画、放送、インターネットなどが既存の叙事をどのように表してきたのかを具体的な資料に基づいて説明している。たとえば、1920年代に始まった朝鮮のラジオ放送が、最初は政治的なプロパガンダの役割に重点を置いたが、しだいに文学講演、郷土劇、武士劇などの叙事的テキストを放送するようになったことを、当時の放送編成表と新聞報道内容を通じて立証している。

このような分析を通じて著者は、当代のニューメディアは既存のメディアを通じて疎通された叙事を「再媒介 (remediation)」する方法で、自分たちの疎通領域を確保し始めると述べる。ここで「再媒介」という概念は近代以降の叙事テキストの歴史を集約して表す概念として認識できる。

では叙事テキストはいかなる理由でニューメディアと結合するようになるだろうか。著者は本書の「補論」に載っている「隠喩の媒介と叙事の媒体」で、発信者と受信者の思考をもれなく表現して移動させる最も効果的な方法として絶えずニューメディアが登場する、そしてこのように登場したニューメディアは既存のメディアと叙事テキストを常に参照しながら発展を遂げてきたという。たとえば、古代パピルスの継ぎ紙形態が現在インターネットブラウザ等で使われるスクロール方式へとつながっており、最近のスマートフォンやタブレット PC のインターフェース (interface) は既存の書物のページをめくる方式と最大限に類似した方法へと発展してきていることが挙げられる。

また「補論」の「テクノロジーと叙事的リアリティー研究」を通じて、デジタルゲームがいかに人々の叙事的欲望を満たしていけるのかに対する答えを、「リアリティー」の具現様相から見つけ出している。時間的リアリティー、空間的リアリティー、行為的リアリティー、データリアリティー、変化リアリティー、デジタルゲームはこれら五つのリアリティーを通じて人間の生と現実を模倣する叙事的な力を得るようになったと分析している。

今日のメディアテクノロジーは非常に速いスピードで進歩している分野であるが、疎通、つまりコミュニケーションに対する欲望や言説とともに人間のすべての力量が集結された結果でもあると、著者はいう。しかし結局、その中で伝えられているものはいつも「叙事」と「ストーリー」であったため、今の変化に対する反作用として、人間に対する真摯な省察の重要性が改めて浮かび上がりつつ、近い未来に

その速度は徐々に落ちていくと思われる。変化の速度や現象それ自体より、変化の要因に注目することが何より重要であるという事実を、著者は知っているはずである。

〔日本語訳 咸章鉉〕

